

ラホヤ村通信

(9)

高垣愉佳

地図帳から地球儀へ Keep in touch!

たった 1 年間の間に、私はアメリカで過ごさなければ一生出会わなかっただろう多くの人達と出会った。帰国してからも連絡を取り合う関係が続いている人達も何人か居る。

中華系フィリピン人からアメリカ人となった教授兼不動産屋さんのエレナ。その後、いきさつは分からないけれど、彼女は私達が借りていたコンドミニアムの部屋を買い取ったらしい。「あなたたちの部屋は私が買い取ったから、いつでも帰っていらっしやい。」と連絡があった。

一緒にコミュニティーカレッジに通いご近所付き合いをしていた若い中国人夫婦は、お子さんも中国から連れて来て、今は家族で暮らしている。初めての外国人の友人が私で、これまで持っていた日本への思い込みはすっかり吹き飛んだようで、帰国する際には必ず日本でトランジットするようになる程、変わったと言っていた。

インターナショナルセンターでボランティアをしていたユダヤ系アメリカ人の画家ビバリーさんは、私が筆ペンで書いて渡したメッセージカードがきっかけで、筆と墨に興味を持ち、コミュニティーカレッジで水墨画のクラスを取っていると。

ヨガティーチャークラスの先生のクリス

は、日本にアシュタンガーヨガを広めてみようと思うようになり、東京のヨガスタジオからのオファーを受けたと連絡をくれた。

1 年間英語チューターをしてくれたメキシコ系アメリカ人 2 世のマリアさんは、アジアに興味を持ち、「ゆかがアジア文化の発祥は中国だと言っていたから、まずは中国に行く事にしたわ。」と言って、Peace coops(平和部隊：日本の青年海外協力隊のようなもの)に参加して、今は中国の貧困地域で英語を教えている。

アジア、アフリカ、南米、ヨーロッパ、中東等、行った事の無い国から来た多くの人達と、日々話し助け合って何とか暮らした 1 年間。私の知らない世界の話しや知らなかった生活の話しをたくさん見聞きし、たくさん影響を受けた。が、同様に私も出会った相手に影響を与えていたのだと、帰国してからのやり取りを通して知った。

日本で生活していると、同じような見た目の人達に囲まれ、同じ言語で話し、多くの人々が似たような物を食べ、同じような新聞やニュースから情報を得る中で生活する事になる。これを長年繰り返していると、あたかもこの世界は平面であるかのように感じて来る。せいぜい感じ取れる広がり日は日

本までで、中学や高校で使っていた地図帳のように、別の国や地域は別のページに在るかのよう錯覚しがちになるのではないだろうか。アメリカでの生活から受けた最も大きな影響は、世界に対する感覚が「地図帳から地球儀へ」と変化した事だったように思う。私たちが暮らすこの世界は、異なる人達が共に暮らす一続きの世界なのだという事実を、ラホヤ村という小さな地域での生活が教えてくれた。

そして、一人一人異なる私達が、常に相互に影響を及ぼし合いながら今を生き、明日を造ってゆくのだという事を、出会った人たちが教えてくれた。

「keep in touch! (繋がってようね!)」とってくれる人達と共に、これからもお互いの小さな蝶の羽ばたきを伝え合っていきたい。

